

《担当者名》 安彦善裕 佐藤 惇

【概要】

病理学は、病気の成り立ちを探究する学問であり、医療従事者にとって不可欠な学問である。生理学などで学習した正常な細胞、組織、器官の形態が病気によってどのように変化するか、または、正常な生体機能が障害された場合、どのような病態に進展するかを学習する。

【学修目標】

心身に障害を有する人、障害の発生が予測される人、さらにはそれらの人々が営む生活に対して適切に対処できる実践的能力を身につけるために、病理学総論により、専門分野および実地教育へ進む基礎作りとして正しい疾病観を身につける。

1. 病理学とは何かについて、病理診断の意義について説明できる。
2. 各疾患の病因、病態について説明できる。

【学修内容】

回	テーマ	授業内容および学修課題	担当者
1	1章 病気と病理学 A 病理学とは何か B 病理診断の意義 C 治療時における病理学の必要性 D 病気の発症	病気の原因は、通常、内因と外因に分けて考えられる。内因、外因によって引き起こされる疾病について理解する。	安彦善裕 佐藤 惇
2	2章 細胞の異常-病気の本態 A 細胞の構造と細胞障害 B 正常細胞の新陳代謝 C 再生と修復 D ヒトの体の多層構造	細胞が障害を受けると、細胞はこれに反応し、適応しようとする。しかし、障害が強く、また永続すると細胞は不可逆的な変化を受け死に至る。このような過程で現れる細胞の形態や機能のさまざまな変化について理解する。 細胞の増殖と分化を基礎にして、各種の病変の修復に伴う細胞の再生、肉芽組織や異物処理に際してみられる器質化など、さらに種々の病的状態に生ずる肥大と増生、化生などを理解する。	安彦善裕 佐藤 惇
3	4章 循環障害 A 循環器系の働き B 循環障害 C 循環障害によって発症する主な疾患と病態	循環系の機能について理解し、循環系に障害が生じると細胞傷害、組織障害、臓器障害へと進展するが、その局所循環障害、全身循環障害を理解する。	安彦善裕 佐藤 惇
4 5	5章 代謝異常 A 代謝とは何か B 代謝異常 C 糖代謝と糖代謝異常 D 脂質代謝と脂質代謝異常 E 核酸代謝と核酸代謝異常 F タンパク代謝とタンパク代謝異常 G カルシウム代謝とカルシウム代謝異常 H 代謝障害によって発症する主な疾患	細胞や組織は生命維持のため様々な物質代謝を行っているが、代謝の異常により細胞や組織に現れる、形態的・機能的変化について理解する。	安彦善裕 佐藤 惇
6	3章 先天異常 A 遺伝とは何か B 先天異常とは C 遺伝要因 D 環境要因	出生時や出生前からの要因による形態および機能に関する異常が先天異常である。四肢や内臓機能に異常がみられることも多くその原因や病態の進行について理解する。	安彦善裕 佐藤 惇
7	6章 老化 A 老化とは何か B 細胞の老化と個体の老化 C 老化に伴う各臓器の変化	老化とは一般的に個体が成熟した後に始まる生理機能の衰退を意味し、日常生活を送るうえでの各能力が失われていくことであり、これの原因や各身体機能の老化について理解する。	安彦善裕 佐藤 惇

回	テーマ	授業内容および学修課題	担当者
	D 老化により発生する疾患		
8 9 10	9章 炎症 A 炎症の正体 B 炎症はどのように起こるのか C 炎症の分類 D 炎症の全身反応	炎症の定義と生体の防御における意義を理解する。炎症の分類およびそれぞれの炎症について理解する。炎症刺激のうちで最も重要なのは病原微生物であり、この寄生によって起こるのが感染症である。病原微生物と宿主の相互作用によって起こる感染症について理解する。臨床現場において患者と接触する際に罹患する危険性がある、肺結核、肝炎およびAIDSの発症、経過、転帰などを理解し、将来の臨床に役立たせることを目的とする。	安彦善裕 佐藤 惇
11 12	8章 免疫と免疫異常 A 免疫機構 B アレルギー C 自己免疫疾患 D 免疫不全症 E 移植免疫 F 免疫及び免疫異常によって発症する主な疾患	免疫は体内に侵入した病原体を排除し病気の発症を免れるためにあるが、その免疫機構を理解し、また免疫の異常により起こるアレルギーや自己免疫疾患などについても理解する。	安彦善裕 佐藤 惇
13 14	10章 腫瘍 A 癌とは何か B 腫瘍の分類 C 癌の特性 D 腫瘍マーカーと癌の診断 E 癌の治療	腫瘍の定義、形態学的特徴を理解する。転移、再発、良性、悪性などの意味を解説し、良性悪性の基準を理解する。腫瘍の発生原因、疫学などを理解する。上皮性腫瘍、非上皮性腫瘍、混合性腫瘍、特殊腫瘍などの各腫瘍の特徴を理解する。	安彦善裕 佐藤 惇
15	総括	これまでの講義内容の総括を行い、病理学総論の全体像について理解を深める。	安彦善裕 佐藤 惇

【授業実施形態】

面接授業と遠隔授業の併用

授業実施形態は、各学部（研究科）、学校の授業実施方針による

【評価方法】

試験(100%) 試験で60%未満の者には再試験を行う。

【教科書】

小林正伸 著 「なるほどなっとく！病理学 病態形成の基本的なしくみ 第1版」 南山堂 2015年

【学修の準備】

指定した教科書の「なるほどなっとく！病理学 病態形成の基本的なしくみ 第1版」を事前に読んでおくこと。(80分)
病理学を学び、理解するには、1年生で学んだ解剖学および生理学の知識が必須である。病因・病態を理解し易くするために、解剖学および生理学について復習し、整理して理解しておくこと。(80分)

【ディプロマ・ポリシー（学位授与方針）との関連】

(DP3) 理学療法士として必要な科学的知識や技術を備え、心身に障害を有する人、障害の発生が予測される人、さらにはそれらの人々が営む生活に対して、地域包括ケアの視点から適切に対処できる実践的能力を身につけている。

【実務経験】

安彦善裕(歯科医師)、佐藤惇(歯科医師)

【実務経験を活かした教育内容】

歯科医師としての医療機関での実務経験を活かし、病理学の基礎的な知識のみならず実際に経験することの多い疾患について実態に基づいた講義を行う。